



# 日本遺産「里沼」を歩く② —「実りの沼」・多々良沼散歩—

## 令和元年度文化庁「日本遺産」認定 里沼(SATO-NUMA)―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―



日本遺産とは平成27(2015)年度に文化庁が創設した制度であり、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、日本遺産として認定するものです。令和2(2020)年度までに全国104件が認定されています。

### 《ストーリー概要》

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができます。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を巡れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。



祈りの沼  
茂林寺沼



実りの沼  
多々良沼



守り  
城沼



### 【里沼(さとぬま)】

沼は、古代・万葉の頃には「隠沼(こもりぬ)」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることが出来る。



## 実りの沼 たたらぬま 多々良沼

### 「実りの沼」～“麦都”館林を支えた多々良沼～

◆多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支える生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。



◆沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、“麦都”となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。

◆「実りの沼」は漁釣の場としても人々の暮らしを支え、鯉の天ぷらや鯉の洗い、鮎の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんばく源となり、もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付いている。

### 日本遺産「里沼」構成文化財(多々良沼周辺)

**5 多々良沼**  
未指定(名勝地)  
館林市の西北部にある周囲約7kmの沼で、平安時代に行われた踏鞴製鉄から名付けられたという。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。この「実りの沼」からとれる鯉や鮎、鯉や鰻などは、里人の貴重なたんばく源となった。



**6 多々良沼遺跡(カナクソ)**  
未指定(遺跡)  
多々良沼北岸にある遺跡で製鉄生産址と伝わる。現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製鉄の時に出土された鉱滓などを見つけることができる。  
[※多々良沼野鳥観察棟で展示]



**7 内陸古砂丘**  
未指定(地質鉱物)  
利根川が形成した自然堤防の砂層で、館林市南西部から多々良沼東岸まで続く。砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。



**8 大谷休泊の墓**  
群馬県指定史跡(遺跡)  
中世の開拓者大谷休泊の墓。休泊は戦国時代の館林城主長尾頭長の招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼からの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は休泊の植林事業によるものである。

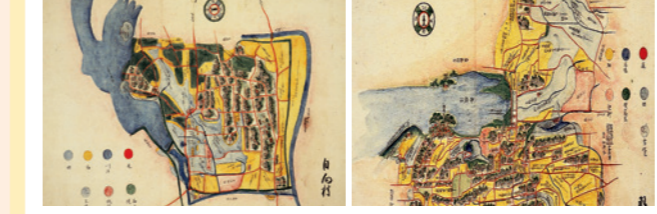


⑤は、日本遺産「里沼」構成文化財の番号です。

**9 上三林のささら**  
かみみげし  
館林市指定重要無形民俗(芸能)  
館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。多々良沼からの用水によって、二毛作が盛んとなった地域で、江戸時代中期から五穀豊穡と厄病神追払の祭事として行われてきた。町内の雷電社の祭礼に合わせて棒術と獅子舞を奉納しながら、地区内を巡行する。



**10 封内経界図誌**  
ほうないけいかいずし  
群馬県指定重要文化財(歴史資料)  
安政2年(1855)に館林城主秋元志朝によって作成された領内52か村の彩色村絵図。村ごとに土地利用が色分けされ、江戸時代の沼の形が一目でわかる。河川や田畑、集落の範囲も描かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることができる。  
[※館林市第一資料館で展示]



**11 沼の漁具と日向舟**  
ぬまぎよく ひなたぶね  
未指定(有形民俗)  
館林市内の沼では、広く網を仕掛けて、舟に乗って集団で行う追い込み漁のほか、ハズ漁・ヤス漁などが行われ、さまざまな漁具が生まれた。沼によって使用する舟も形が違い、多々良沼の舟は、冬に凍結した氷から舟べりを保護するために一枚板を取り付けており、「日向舟」と呼ばれている。  
[※館林市第一資料館で展示]



**12 川魚料理(鯉・鯉・鮎・鰻料理)**  
かわうし料理  
未指定(民俗)  
沼が点在する館林地域では、昔から鯉・鯉・鮎・鰻などの川魚料理が食されてきた。館林のもてなし文化の特徴として、川魚料理をふるまうことがある。中でも鯉が有名で、天ぷらや小麦粉をあえて揚げたタタキアゲは、この地域の代表する料理となっている。  
[※市内の川魚料理店でご賞味ください]



**20 正田醤油(株)旧店舗・主屋 [正田記念館]**  
しょうたしょうゆ  
国登録有形(建造物)  
城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治6年(1873)に醤油醸造を開始した。正田記念館は嘉永6年(1853)建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展示されている。



**30 創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館]**  
そうぼうきにつしせいしんほくせいこうじょうじむしょ  
未指定(建造物)  
明治43年(1910)に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造2階建ての洋風建造物。「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料として、日本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業110周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。



**37 館林のうどん**  
たてぼし  
未指定(民俗)  
江戸時代に「饅頭粉」(小麦粉)は館林藩の特産として将軍家へ献上されていた。「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからっ風による乾燥した気候からうどんの産地となった。“麦都”館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。  
[※市内のうどん店でご賞味ください]



**38 麦落雁**  
むぎらくがん  
未指定(民俗)  
大麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓で、文政年間(1818~30)に完成して以来、館林城主献上の菓を賜ったという。城下町に根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。  
[※市内の土産物店でご購入できます]



多々良沼野鳥観察棟 日本遺産「里沼」展示 コーナー  
構成文化財「カナクソ」やパンフレット類もありです。  
【FREE WI-FI SPOT】  
■場所:多々良沼野鳥観察棟(群馬県館林市日向町 日向漁港前)  
■期館:年中無休 9~16時まで  
■入館:無料  
■問合せ:館林市市民環境部 地球環境課  
TEL 0276-47-5125



日本遺産 JAPAN HERITAGE  
日本遺産「里沼」を歩く②  
—「実りの沼」・多々良沼散歩—  
編集・発行 館林市「日本遺産」推進協議会 歴史文化部会(館林市日本遺産プロジェクト)  
〒374-0018 群馬県館林市城町3番1号  
TEL 0276-71-4111  
編集協力 一般社団法人TDO建築設計事務所  
群馬県立多々良沼公園 JA 邑楽館林千代田町緑化組合  
群馬県立多々良沼公園 JA 邑楽館林千代田町緑化組合  
図版提供 館林市史編さんセンター  
ヤスラオカイッペイ ART STUDIO  
写真提供 中山健一 群馬県館林土木事務所  
発行日 令和4年(2022)3月18日  
※本パンフレット記載内容の無断転載を禁止します。 SATO-NUMA.JP



